

# 国語科における聞くことの指導のあり方に関する研究

## —第1学年単元「わたしは、なんでしょう」における対話指導の実践から—

教育実践高度化専攻

小学校教員養成特別コース

P O 8 0 8 0 1

山本 里子

### 1 研究報告書の構成

#### 第1章 研究の目的と方法

#### 第2章 「聞くこと」の指導

##### 第1節 「聞くこと」とは

##### 第2節 学習目標としての「聞くこと」

#### 第3章 先行実践にもとづく「聞くこと」の指導の分析

##### 第1節 先行実践例の分析

##### 第2節 先行実践からみる「聞くこと」の指導の留意点

#### 第4章 稿者による実践の分析と考察

##### 第1節 実践の目的と概要

##### 第2節 実践の実際と考察

##### 第3節 まとめと今後の課題

#### 第5章 総括と今後の課題

### 2 研究の概要

#### (1)問題の所在と研究の目的

国立教育研究所が行った「コミュニケーション調査（平成6年度）」<sup>1</sup>において、「先生の話聞いてよく理解すること」に自信がある小学生は16%である。また、友だちとの会話で「人の話をよく理解すること」に自信がある小学生は29%とどちらも低い値である。これらの結果からも、多くの子どもたちが授業に限らず、私的な場面でも公的な場面でも「聞くこと」がうまくできていないことがわかっている。また、稿者が平成22年2月に実習校（第1学年男子12名、女子9名、計21名）で行った意識調査でも、教師の話していることが「時々わからない」と答えた児童が5名いる。さらに約半数の9名が、友達の話していることが「時々わからない」または「まったくわからない」と回答している。子どもたちは授業中だけでなく、私的な人間関係でも「聞くこと」に自信

がないのである。

こうした現状を打開するために、国語科の授業において「聞くこと」の取立て指導が大切であると考え。従来、「聞くこと」の指導というと外面的で目に見えるものに対する指導が中心であった。これは、話す能力に比べて聞く能力は実態が見えにくく、評価しにくいことが原因としてあげられる。しかし、話し手と聞き手の相互交流のあるコミュニケーションができるようになるためには、話し手が伝えようとしている事柄を、その奥にある事実を考えながら、聞くことのできる子どもを育てる必要がある。

そこで、本研究では「聞く力」を身につけさせる対話指導をどのような手立てで行うかを具体的に明らかにすることを目的とする。その前提として、子どもたちにつけるべき「聞く力」とはどのような力であるかを探っていく。

#### (2)研究の対象と方法

##### ①研究の対象

連携協力校である加東市F小学校第1学年21名を対象に行う。（平成22年度）

##### ②研究方法

- ・文献研究（理論・先行実践事例の分析）
- ・児童のアンケート、感想文、作成した問題文、及び自己の実践記録から、授業者と児童の逐語記録を作成し分析。

### 3 研究の成果

先行実践にもとづく「聞くこと」の指導の分析を行い、効果的な手立てについて検討した。その結果、次のことが明らかになった。

- ①話題の工夫（低・身近なこと、中・経験や気持ちを聞き合うもの、高・広い視野に立ったもの）
- ②見本モデル（生きた手本）の提示

③指導者の評価と児童の評価（自己評価・相互評価）

④グループ形態の変化（ペア→グループ→クラス）

⑤「おたずね」を中心に授業構成

以上が、先行実践において指導に際しての手立てである。以上に挙げた5つの手立てをもとに、実践を行った。

実践の分析方法として、「学習の関心・意欲・態度の側面からみた特徴」と『聞く力』の質的側面からみた特徴について、アンケート、感想文、児童の作成した問題文、授業の逐語記録をもとに成果と課題について分析・考察を行った。

「学習の関心・意欲・態度の側面からみた特徴」としては、児童のアンケート結果から「話すこと・聞くこと」に対する意識の変化は顕著にはみられなかったものの、感想文の記述から単元に対する関心・意欲・態度は高かったことがわかった。この結果の考察として、まず有効であった手立てについては「必ず質問をするというルール」や「対話形態を変化させる」が挙げられる。次に、問題点としては「問題文作成段階の指導の不足」「ルールの確認」「グループ活動の際の、見本モデルの提示」が挙げられる。この三つを改善していくことが、児童の学習への関心・意欲・態度の向上に繋がると考える。

『聞く力』の質的側面から見た特徴」としては、①の話題の工夫については、単元の導入において、授業者が児童にとって身近なクイズをしたことによって、単元に対する興味が湧き、クイズをしたいという思いに繋がった。

②の見本モデルの提示は、指導者が実際に質問して見せることで、質問の仕方や内容を理解することができた。低学年においては、実の場で生きた手本を見せるということがより重要である。今後の課題として、①班活動の際、授業者は時間を決めて指導に回る、②児童の見本をもっと多く取り上げるといった二点が挙げられる。

③のグループ形態の変化については、「ペア→グループ→クラス全体」とグループ形態を変化さ

せることで、全員が必ず話し手と聞き手の役割を両方経験することができた。また、精神的な緊張の少ないペアから、徐々に緊張が高まるグループ、クラス全体へと変化させることで、子どもたちも徐々に対話や質問に慣れることができた。さらに、場面に応じて対話するという意識に繋がった。

④の授業者の評価と児童の評価については、十分な成果をあげることはできなかった。原因として、児童の具体的な発言を捉えた評価言の不足である。今後はこうした評価言を、明確な観点をもって行うように改善が必要である。さらに、児童の評価についても、自己評価の意見を全体で交流する場を設けることができなかったため、児童の自分自身のつまずきの発見に繋げることが難しかった。自己評価をどのように授業に位置づけるかについて検討していく必要がある。

⑤の必ず一人一つは質問するというルールについては、「おたずね」しようとすることで、必然的に聞かなければならないという意識が生まれ、逐語記録の分析からも、児童はよりよく聞くことができていることが明らかとなった。

#### 4 今後の課題

- ・状況に応じた具体的な評価言の確立
- ・「聞くこと」の自己評価、相互評価について

#### 引用・参考文献

- 1 国立教育研究所『国際化の進展に対応したコミュニケーション能力の育成を目指すカリキュラムの開発研究 小学校調査報告書（平成6年度調査）』国立教育研究所、1994年。
- ・大村はま『大村はま国語教室②話すこと・聞くことの指導の実際』筑摩書房、1983年。
- ・高橋俊三・声とことばの会『小学校国語科聞く力の評価と指導』明治図書、2007年。
- ・村松賢一『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習』明治図書、2001年。
- ・若木常佳「小・中学生における聞き取り能力の実際と課題」『全国大学国語教育学会発表要旨集』全国大学国語教育学会、No.113、2007年。
- ・倉沢栄吉『聞くことの学習指導』明治図書、1974年。

修学指導教員 吉川 芳則